

greetings of the year by the President

令和7年1月6日(月)、仕事始めにあたり、竹之下誠一理事長兼学長より、全職員を対象に、新年の挨拶がありました。

(以下抜粋)

今年は本学にとって、「仕込み」の年です。言い換えれば課題解決に向けた大きな取り組みの基礎、基盤を作る年とも言えます。昨年より第4期中期目標・中期計画がスタートし、私たちが向かうべき方向や使命を改めて示し、共有しました。

その取り組みのひとつが附属病院の再整備です。基本構想、基本計画の策定を経て、今年から基本設計の段階に入ります。いよいよこれまでの議論を「形」に置き換えていく作業が始まるということです。

例えば基本構想では「効率的・効果的な医療の提供」を附属病院の課題のひとつとして挙げています。これはまさに今後目指したい附属病院の姿であることに間違いありません。しかし、いざこれを形にするとした時、皆さんはどのような具体的なイメージを想起するでしょうか？ 掲げる理念、目標は言葉として共有できても、それを具現化する時には人それぞれ、担当する分野、専門領域によっても求める形は違います。いかに異なるイメージをすり合わせ最適解を導き出すか。これまで以上のコミュニケーションと考察が必要になります。

これまでの延長線上で 附属病院を整備して良いのか

そして、何をもって最適解とするかが次の課題となります。そのために大切なことは、こ

誰がために、未来を見据えた 医療基盤構築へ議論を尽くし前進を

の再整備が、何のため、誰のためなのかを常に忘れないことです。理念、構想の根本には、高齢化、労働生産人口の減少と働き方改革、医療・介護ニーズの変化など社会環境の変化があります。誰も経験したことのない社会環境の変化に対し、これまでの延長線上で単に最新、最先端の医療機器を導入した病院を整備すれば良いのでしょうか。

50年先まで福島県の医療を 担う病院に求められるものは

これまでにない新しい医療機関の在り方を模索するために私たちに求められるのは洞察力です。洞察力とは物事を深く鋭く観察してその本質まで見通す力のことです。目先の課題解決だけでなく、これから40年、50年先まで福島県の医療を担う特定機能病院に何が求められるのか、備わるべきなのか。私たちの英知を結集し、その基礎、基盤を固めることが不可欠なのです。

同じことは双葉地域における中核的病院の整備についても言えます。この整備は双葉地域の医療提供課題解決の一翼を担う大きな転換点になるものと考えます。そして同時に、人口減少など日本が抱える様々な医療を取り巻く課題に対し、解決の道筋を示すモデルケースという大きな意味も持つと考えます。

福島が抱える医療課題解決に 向けた大きな歩みへ

そのために新たな病院がどうあるべきか思考と議論を尽くさなければなりません。

これらのために必要なことは、私たちひとり



ひとりの幅広い視野と問題意識です。

私たちが言えば、医療課題について、医療の面からだけではなく、経済や気候、エネルギーや社会インフラの整備など様々な面と組み合わせで検討と思考を繰り返し、課題を立体的にあぶりだす努力が必要なのです。

附属病院の再整備、双葉地域の中核的病院設置と附属化は、福島県と私たちが抱える医療課題の解決に向けた大きな一歩です。その基礎、基盤を強固で揺るぎ無いものにすべく、2025年、皆さんには医療を超えて広く興味関心を持ち、意識を拡げて課題に向き合い、深い洞察力を養うことを意識してください。

未来の検証に耐える医療資源を私たちは構築しなくてはなりません。そしてそれは、実際の工事が始まってからでは遅く、まさに今が正念場なのです。

時に挫折や失敗もあるものと思いますが、失敗は成功の通過点でしかない信じて、前に進みましょう。皆さんの奮起と奮闘を期待しています。

挨拶の全文は、HP
「学生・教職員の方へ」
に掲載しています。



Web
site

福島県立医科大学附属病院
再整備基本構想の策定について



双葉地域における中核的病院
附属病院化を受諾について



田巻倫明教授がIAEAの課長に就任しました

医学部健康リスクコミュニケーション学講座田巻倫明教授(休職中、以下「田巻教授」)が、令和7年1月5日付で国際原子力機関(以下「IAEA」)において、「原子力科学・応用局保健部 応用放射線生物学・放射線治療学課長」*に就任しました。

今後、田巻教授は放射線治療および放射線生物学の専門家として、IAEA加盟国の同分野での活動を支援・推進する役割を担います。

特に、低中所得国におけるがん治療の放射線治療を促進する「Rays of Hope」イニシア

チブをはじめ、IAEA関連プロジェクトの推進に尽力されます。

田巻教授はこれまで、放射線治療専門医として、主にアジア地域での放射線治療を推進するIAEAプロジェクトに数多く携わり、その豊富な知識と経験が、国際的な放射線医療の発展とIAEA加盟国への支援に大きく寄与することが期待されています。

これからも、田巻教授のIAEAでの活動について、FMU NEWS Letterにて随時ご紹介いたします。



末筆ながら、田巻教授がIAEA保健部課長として益々活躍されることを心より祈念申し上げます。

※正式呼称
Section Head, Applied Radiation Biology and Radiotherapy Section, Division of Human Health, Department of Nuclear Sciences and Applications, IAEA



TOPIC

燦々会の方々による須賀川支援学校医大校訪問イベント開催

令和6年12月19日(木)、5年ぶりとなる須賀川支援学校医大訪問のイベントとして、世界的なピアニストの西川悟平氏のピアノコンサートが燦々会からプレゼントされました。

パラリンピックの閉会式でもピアノ演奏をした西川さんは、ご自身の体験を子どもたちに話しながらピアノの演奏をしてくださり、子どもたちだけでなく集まった人全員の心に響く演奏会となりました。1回目は医大校の教室にある

ピアノで、2回目は病棟に移動して電子ピアノで演奏してくださいました。

当日参加できなかった児童生徒にも、燦々会の方々からのプレゼントが届き、喜ぶ姿がありました。西川さんの心のこもった演奏が、今ここに来ることができない子どもたちにも届いたらいいのになあと想いを馳せたり、それぞれの受け止め方でピアノの音色に耳をかたむけたりできた素敵な時間となりました。



(写真、文とも須賀川支援学校医大校提供)



TOPIC

第4回福島県浜通りバイオ産業推進フォーラムを開催しました

令和6年12月19日(木)、本学医療・産業トランスレーショナルリサーチセンター(以下、TRセンター)は南相馬市市民情報交流センターで第4回福島県浜通りバイオ産業推進フォーラムを開催しました。

本フォーラムは、福島復興再生計画に記載のとおり「TRセンター、国、福島県、医薬品関連企業、浜通り企業等が連携しながら浜通り地域における医薬品関連産業の集積に資する取組を検討するための定期的な意見交換の場」として開催しているものです。

第4回となる本フォーラムには本学、国、県、医薬品関連や浜通りの企業から約50名が出席しました。

竹之下誠一理事長兼学長、門馬和夫南相馬市長の挨拶があり、先端臨床研究センター志賀哲教授から「At-211(アスタチン)を用いた薬剤開発」について現況の紹介が行われました。

また、いわき市に工場を置き、ADC(抗体薬物複合体)を含む医薬品の開発に取り組む第一共株式会社、令和7年5月に南相馬市に製造・開発棟が着工予定の株式会社ARCALISのそれぞれ事業内

容の紹介があり、活発な質疑応答が続きました。

今後の浜通り地域における医薬品関連産業の更なる集積に向け具体的な期待が高まりました。



TOPIC

高度医療機器体験会を開催しました

令和6年12月21日(土)、本学において、福島県教育委員会と共催で高度医療機器体験会を開催しました。対象は県内の医学コース導入校の高校生20名です。

本学附属病院にある最新の高度医療機器を実際に操作し、最先端の治療技術に関する講義や医療現場の見学を通じて、医療や健康の大切さを学べる体験学習を提供しました。

また、この活動により、参加者が実際の医療機器に触れる機会を得て、将来のキャリア選択に役立てることを目的としました。

座学プログラムでは、心臓血管外科の治療を通して最新の治療法を学び、体験プログラムでは、医療従事者以外では見ることも、体験することもできないプログラムに感嘆の声が上がりました。

